キール

タコ中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キール

【Nコード】

N2670Y

【作者名】

タコ中

【あらすじ】

あるゲーム会社が作った体感型ゲーム「キール」に招待された主人公。

主人公はゲームをクリアーできるのか？

この中で出てくる地名は本当に存在し、施設、建物も存在します。
(実際と少し違う可能性有り)どうか、「了」承ください。

体験1 招待（前書き）

最初はプロローグです。

体験1 招待

「ただいまー。」

そう言っつて自宅に玄関を開けたのは、野々市の市内に住む田中 勇輝（たなか ゆうき）だ。

「お帰り。」

と母がキッチンで晩御飯を作っている。

「なんか勇（勇輝のこと）あてで封筒来てたわよー。」と母が言う。

勇輝がリビングの机を見ると茶封筒がおいてあった。確かに宛名は勇輝になっている。

「珍しいな。」

と言いながら封筒を開けた。

中には一枚の紙と「特別ご招待券」と書いてある長方形のチケットが入ってた。

紙にはこう書かれていた。

「今回はKANAMEが作りました「キール」の特別ご招待をさせていただきました。この「キール」は、体感型のゲームとなっております。実際にゲームの中でプレイしているような感覚が味わえます。プレイヤーは、自分自身となっており、コンピューターですぐさまプレイヤーの体力などをゲーム内にインプットします。ステージが石川県野々市市ということもあり、この度は一般体験前の完成プレイにご招待させていただきました。」

「おおー」勇輝は一人でいつている。

なぜなら、テレビでもこの「キール」は騒がれており、しかも体験

前に遊べるからである。

招待の日は日曜日ということもあり、

「母さん、なんか招待されたいってきていく？」

「いいよ。」と母はすんなり了承してくれた。

こうして、その週の日曜日金沢市の新しくできた、KANAME石川支社にタクシーで向かった。

体験1 招待（後書き）

野々市市は町から市になるので、ご了承ください。
もし、自分の家が出てきても怒らないでください。

体験2 説明

勇輝はKANAME支社前に来た。支社の前には報道陣がたくさんにいた。

「今回体験する感想を！」

「選ばれた感想を！」

などたくさんのかスターからインタビューを迫られたが、勇輝は無視して、KANAME支社に入った。

すると、

「勇輝じゃねえか！」

と言う声で一人の男が駆け寄ってきた。

「お！沢田じゃねえか！」

勇輝は覚えていた。中学校からの親友であるから。

名前は沢田 利哉（さわだ としや）だ。

「勇輝と高校は別になってなかなか会えなかったけどここで会うとはな。」

「そうだな。」

しばし、二人は談笑していた。

「それにしても、ロビーだけでも広いな。」利哉がうらやましく言った。

「ああ、いいよな。」

勇輝も同じことを思った。

「そう言えば、今回なんで選ばれたかわかるか？」唐突に利哉が質問してきた。

「知らねーよ、そんなこと。」ぶっきらぼうに勇輝が答える。

「なぜなら…舞台が野々市じゃん。それで、このゲームのプレイ人数が200人までなんだよ。そして、200人っていえば、この野々市の中学校の一学年分なんだ。」
利哉が説明を始めた。

「それで？」勇輝も興味を持った。

「だから、パソコンでまず野々市にある二つのうちどっちの中学校か決める。そして、卒業年代をパソコンでランダムに決める。そして、この、高校一年になった俺たちが選ばれた。そういう分けよ。」
利哉の説明が終わった。

「なんで卒業生なんだ？」勇輝がきく。

「対象年齢高校だから。」当たり前のように利哉が言う。

「ああ、そーゆーこと。」勇輝は納得したらしい。

「んで、なんでお前が知ってたんだよ。」

勇輝は返す言葉がなかった。

よく周りを見ると知っている顔ばかりだった。

「勇輝くん。」利哉が変な呼び方をした。

「なんだよ。」と、勇輝が言う。

「ここには、俺らの年の卒業生が居るんだぜ。」ニタニタしながら、利哉は言う。

「だから、なに？」勇輝はいじつかしくなってきた。

「お前のコクったやつも居るんだぜ。」利哉が言う。

勇輝は顔を真っ赤にする。

勇輝は2年の時に告白した女子がいる。学年でもかなりの美女だった。その人に告白してフラれた経験があるのだ。

「バカなこと言うなよ！」と勇輝が言う。

「怒った〜こわ〜。」と利哉がふざける。

すると、ロビーにある、大きめの自動ドアが開き、中から係員が出てきた。

「今回ご招待させていただきました皆さんはこちらに来てください。」

その声と同時に、ロビーでしゃべったりしていた人たちも立ち上がり自動ドアに向かった。
勇輝と利哉も向かった。

体験2 説明（後書き）

わからない部分もあったと思いますがご了承ください。
誤字脱字もあるかな。

体験3 また説明(前書き)

ようやく銃が出てくる〜

体験3 また説明

自動ドアに向かうと、係員が説明していた。

「これから、ゲームを始める準備をします。自動ドアの奥には、シヤワールームのような感じに並んでいます。そのなかに椅子があるので座って待っていてください。」

そういうと、みんなは、なかに入っていく、シヤワールームのようなかんじになっていて、みんなは、一つ選び、座っていった。

「じゃあな。ゲームの中で会おうぜ。」利哉が椅子に座り言った。

「ああ、わかった。」勇輝はそう言い、利哉の隣のシヤワールームらしきところにある、椅子に座った。

椅子はマツサージチェア見たいでフカフカしていた。

向かいには、見たことあるけども、名前がわからない女子が座っていた。

数分後に係員がたくさん来て、一人一人に上から出したバイクのヘルメットを被せた。前には、さっきの女子がヘルメットをかぶっているのが見えた。

すると、アナウンスで、

「これよりゲームを始めます。詳しい説明はゲームの中で行います。それでは、いってらっしゃい。」

「いってらっしゃい」と同時に、意識がとんだ。

ふと目を開けると、知っている場所に座っていた。そこは、市が作

った、文化会館「フォルテ」の中にあるステージの観客席の前の方だった。

周りを見ると、知っている人がたくさんいた。

ポンポン

肩を二回軽く叩かれた。

「ここってゲームの中だよな。」利哉が聞いてきた。

「多分きつと……。」勇輝は信じられないようだ。手や、足、など、現実世界とは変わらないものだったからである。

「デコピンしてくれないか？」利哉がデコを出す。

勇輝はデコピンをした。

「いたっ！……痛みまでリアルじゃねえか。」

周りも信じられないような顔をしている。

すると、ステージの上に女性が出てきた。

「どーもー、こんにちわ〜。今回は「キール」をご利用いただきありがとうございます〜。それでは、ゲームの説明をします。」

説明を始めた。みんなは、その説明を真面目に聞き始めた。

「この、ゲームは簡単。ただ、ゾンビから24時間生き残ればいいだけ。」

ざわざわし始めた。

「はい、静かに。」といい、手をパンパン叩いている。

みんなは静かになる。

「24時間といっても、現実世界では2時間だから、安心して。」
みんなはホットしている。

女性は説明を続けた。

「今回の舞台は野々市市内のみ。そして、クリア条件は、5万体重のゾンビの全滅か、自衛隊が助けに来る24時間後となります〜。」

そして、ゲームオーバーの条件は、ゾンビに噛まれてゾンビになるか、事故、自殺、殺害されるなどによる、死亡した場合になります。注目の武器ですが、日本で手に入る武器。あ、合法的にね。だけになるよ。だから、例えば、ショットガンだと、日本では3発以上入れたらダメだから、3発しか入らないよ。そーゆー訳です。」

これで説明が終わったと思いきや、まだ話す。
「ちなみに知っておくと便利なのが、まず、放置車両など全部に鍵がついてる訳じゃないよ。さらに、もちろん、駐車場に止めてある車はほとんど鍵がかかっているよ。まだ言っと、野々市市役所には自衛隊の一時的な基地が放置されているよ。どうやら、ゾンビに対抗しに来たようだけど、負けちゃったみたい。これで説明を終わります。」

みんなは「ふ〜」とため息をついた。

「あ、武器の使い方説明しなきゃ。」

説明をしていた女性が忘れていたかのように話す。

このあと、武器の使い方説明された。

「〜と言っ訳でした。これで説明を終わります。みんな、後ろの武器庫から、好きな武器を選んでね。最初は、ハンドガン、上下二連式散弾銃のうち一つだけ選べないからね。あと、ハンドガンはマガジン3つ、ショットガンだと弾は20発だけだから。銃は交番とかにあつたり、弾は、車の中とか民家の中にあるかもよ〜。それじゃ、幸運を祈ります。」
そーいうと、女性は消えた。

みんなは指示どおりに後ろに現れていた武器庫から好きな銃を選んだ。
ハンドガンとショットガン

「お前なに選んだ？」利哉が聞いてきた。

「ん？俺は上下二連式散弾銃」勇輝は上下二連式を利哉に見せた。

「あ〜、俺と違うな。俺はハンドガンだぜ。多分これ、グロツクか

な？」そう言っつて、ハンドガンのグロックを見せてきた。

「んじゃ、いこうぜ。」利哉が言う。

どうやら、勇輝と利哉がステージにいる最後らしい。

二人が出ると、駐車場でみんなはグループを何個も作り話していた。正確に言つと、仲がいい人たちで固まっていた。もちろん、一人もいた。

二人は一番でかいグループに混じった。

すると、市内にアナウンスが響き渡った。

「スタート！」

体験3 また説明（後書き）

そんなに銃には詳しくないので、説明は省きました。
しかも、銃の名前もだいたいで、詳しくは書きません。
でも、いろんな銃を出していきます！

ってか、説明分かりにくいな。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2670y/>

キール

2011年11月6日04時12分発行